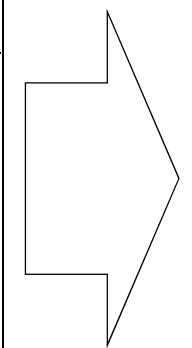


札幌の生物多様性にかかる現状分析と戦略への反映

生物多様性にかかる現状の分析		強み・資源 など	弱み・失われたもの など		
保全と持続可能な利用を推進する土台	1	<ul style="list-style-type: none"> 市内EMS、小中学校における環境教育、さっぽろエコメンバー制度、動物園やさけ科学館などの啓発拠点、各種講習会や体験型イベントなど多様な主体による幅広い取組が頻繁に行われており、生物多様性に関する環境教育や普及啓発を推進する素地がある。 札幌市では従前から市民や事業者と一体となってごみ減量や温暖化対策などへの取組を進めてきており、環境問題に対する市民や事業者の意識が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> 緑化や多自然型川づくりの推進には、整備後の維持管理等への地域住民の理解と協力が重要 	<ul style="list-style-type: none"> 生物多様性という言葉は、COP10を機に認知されつつあるが、必ずしも関心につながっていない可能性がある。 生物多様性を重要視している事業者は全体の約88%と多いものの、自社の企業活動との関連性は低いとされている事業者も全体の63%を占めている。 生物多様性という言葉自体が、非常に幅広く複雑で難解なため、敬遠されがちで理解が進みにくい要因となっている。また、それぞれの主体がどう関連していかを知っている人も少ない。 	
	2	<ul style="list-style-type: none"> 私たちの生活と生物多様性との関わりや、札幌市の生物多様性の実態について、十分な情報があるか、またそれを体系的に集積し共有する仕組みがあるか。 	<ul style="list-style-type: none"> 市内には、自然観察や情報発信等の活動を行っている団体や事業者、大学等の研究機関が多数ある。 自然系総合博物館建設構想の第一歩として、人材・資料・情報・ネットワークづくりを進めていくための博物館活動センターが整備されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 市内の生物分布や経年変化等を把握できるだけの系統だった十分なデータがない。 情報を集積・共有する仕組みが確立していない。 市内の自然環境を網羅的、継続的に調査する体制や財源がない。 地域コミュニティが弱体化している。 	
	3	<ul style="list-style-type: none"> 生物多様性を守り、将来の世代に伝えていくための、技術や情報が確立しているか。 	<ul style="list-style-type: none"> EMS等の活動を通じた環境配慮活動にに取り組んでいる事業者が多数あり、市内でもEMSが浸透しており、生物多様性保全に有効な取組の方向性や具体例が示されれば、実際の行動や新たな工夫を生み出す土壌がある。 動物の繁殖技術を開発することができる円山動物園がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 生物多様性を保全するために何をすれば良いか、また、取組の成果をどう評価すれば良いかが分かりづらいため、動機付けが働きづらい面がある。 生物多様性を評価するための調査方法やモニタリング方法が確立されているとは言えない。 緑地の連続性や緑被率が生物多様性に及ぼす影響や、どのような状態が生物多様性に寄与するのかが不明 	
	4	<ul style="list-style-type: none"> 生物多様性の保全について、多様な主体が参加して、継続的に取り組んでいくための体制はあるか。 	<ul style="list-style-type: none"> 100件以上の多くの団体がおり、様々なフィールドで多様な活動が行われている。 みどりのボランティア登録制度や環境プラザ、市民活動サポートセンター、サポートはつと基金、事業者の環境配慮活動支援事業など、活動の場や情報・技術・資金・資材などの面から支援する制度が整備されている。 環境プラザやさけ科学館、みどりのセンターなど、活動の拠点となりえる施設が多数ある。 	<ul style="list-style-type: none"> 活動の継続や発展が必ずしもうまくいっていない団体では、資金不足、人材不足、参加者数減少を課題とする団体が多数。 市内にどのような団体があるか、どのような活動がされているか、などの情報が、広く市民に認知されていない。 生物多様性保全のための連携体制は未整備。 	
理想の姿を考えていくための基礎情報	5	<p>【生態系の状況と生物の生息・生育状況の現状】</p> <p>札幌の本来の生態系はどのようなものだったと考えられるか。 現在に至るまでに、何が残され、何が作られたか、また、何が失われたか。 現在、どのような問題が起きているか。 今後、どのような問題が懸念されるか。</p>	<p>潜在植生は、南西部山地の亜高山帯では針葉樹林やタケカンハ林、山麓部から東南部丘陵地にかけては針広混交林や落葉広葉樹林が成立し、扇状地を含む低地には、湿地林が分布していたと考えられる。</p> <p>著しい標高差と多様な地形、冷温帯から亜高山帯への移行部分に位置することや気候条件などから、元来、多種多様な生態系や生物相が成立する条件を備えている。</p> <p>明治以降の140年間に計画的に建設された街であることから、本州における里地里山のような自然はないが、原生的自然から欧米的人工的自然まで、幅広く豊かな自然が、都市の利便性と共存している。</p> <p>南西部山地や東南部丘陵地の現存植生は、一部にトドマツ・カラマツ等の植林地やミズナラ、カンフ、コナラ等の萌芽再生林がみられるものの、概して植生自然度は高い。</p> <p>40年前と比べて平均気温は約1℃、日最低気温は5～10℃上昇している。過去50年間で、サクラやウメの開花日は4日程度早まっている傾向、カエデの紅葉日は2週間程度遅くなっている傾向がみられる。</p> <p>多くの市民や観光客に自然が豊かと認識されており、札幌の都市イメージを形成している。</p> <p>【質的な豊かさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 市街地に隣接した天然記念物(円山・藻岩山) 各種法令等で保全地域に指定され、自然性の高い森林や草原湿地が維持されている南西部山地 多様な生態系(森林、湿原、河川、湖沼、農地、公園、緑地など)と景観 鮮明な四季と景色の変化(雪、百花繚乱の初夏、渡り鳥、紅葉、落葉、雪虫、サケの遡上 など) 河川は、上流・中流・下流の全ての条件が市域の中にある。 市街地では、外来種も積極的に導入しながら札幌の特徴的な都市景観の形成に活かしてきた 札幌市及び周辺の石狩川沿いに発達した大小の湖沼は、ガン・カモ類の重要な渡来地となっている。 <p>【量的な豊かさ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 森林面積が市域の約63%を占めている。 自然植生の割合は市域の約52%を占めている。 6,118種の動植物が確認されている。このうち403種は、種の保存法等の法令や国・道のレッドリストの指定を受けている希少種である。 公園の数が多し <p>【身近さ】</p> <ul style="list-style-type: none"> 開拓当初から計画的に残されてきた天然記念物(円山・藻岩山)や街中の緑地(北大植物園、知事公館など) 街中を流れる河川と河畔の緑地(豊平川など) 郊外にある、市民が身近にふれあうことのできる自然性の高い地域:過去に伐採等の改変を受けたが、現在では成熟した二次林、防風林として整備された樹林地、かつての石狩湿原のなごり(篠路福移湿地など) <p>【現在のまちづくりの傾向】</p> <ul style="list-style-type: none"> コンパクトシティ化 自然環境に配慮した川づくりが進められてきている。 	<p>扇状地を含む低地や台地の現存植生は、宅地や耕作地として土地利用されており、植生自然度は低い。石狩平野の泥炭地植生などの旧来の自然の姿は消失している。</p> <p>開拓～都市化の過程で失われた生態系</p> <ul style="list-style-type: none"> メム(湧水)、低地の湿原、湿地林 現状のデータでは、市内の生物多様性の向上又は劣化の傾向を確認できない。 緑地の分布状況やその変化が分からない。外来種による在来種への影響も不明。 札幌市内で確認された6,118種の動植物のうち、365種が北海道ブルーリストにおいて外来種に選定されている。このうち、8種が特定外来生物に指定されている。また、43種が環境省の要注意外来生物に選定されている。 人間活動に対する耐性を高め、極力その影響を抑えられるような環境を作っていくためには、動植物の生息・生育環境を増やしていくような取組が効果的と考えられる。 <p>【森林】</p> <ul style="list-style-type: none"> 円山・藻岩山は市街地と直接接しているため、外来生物の侵入や環境変化等の影響を受けやすい。文献調査においても帰化植物の増加傾向が伺える。 森林面積に大きい変化がない中で森林蓄積が増加していることから、森林が密生化して単調化することによる生物多様性への影響が懸念される。 <p>【市街地】</p> <ul style="list-style-type: none"> 市街地の緑被率は高いとは言えない(18.1%) 都市化に伴う生態系ネットワークの減少と、それに伴う動物の移動阻害 豊かな自然と市街地が直接接しており、緩衝帯がない。 ヒゲマやエゾシカ、カラスなど、野生生物とのあつれきが生じている 飼いきれなくなったペットが遺棄され、市街地や周辺地域で野生化している(アライグマ、ミドリガメ など) <p>【農地】</p> <ul style="list-style-type: none"> 担い手不足や耕作放棄等により、遊休化や非農地化が進んでいる。 特定外来生物であるアライグマによる農業被害 <p>【河川】</p> <ul style="list-style-type: none"> 治水・利水を優先した川づくりが長く続けられてきたため、本来の自然・生態系の姿や特性を十分把握せずに画一的に整備された河川がある。 上流部での取水や中流部での下水道整備等により、市街地部分での河川水量が減少。 外来種による在来種への影響や、移殖放流による遺伝子の多様性への影響が懸念されるが、詳細は不明。 <p>【その他】</p> <ul style="list-style-type: none"> 高山植物や昆虫類の一部は、盗掘の懸念がある。 	
	6	<p>すべての生命の存立基盤や、将来にわたる暮らしの安全性を守るものとしての関わり(基盤サービ・調整サービス)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 市民、企業の環境問題への関心は高く、温暖化対策をはじめ、環境配慮の取組を進めてきている 治水など、人為により暮らしの安全性や快適性の向上を図ってきた。 豊平川の「56水害」以降、堤防の決壊を伴う大規模な洪水は発生していない。 	<ul style="list-style-type: none"> 人口や人間活動の増大に伴い、地球規模で温暖化や生物多様性の喪失が問題となっている。 札幌市は190万人の市民が暮らす消費都市であり、市内外の環境に与える影響は大きい。 現状、市内では、開発等による深刻な影響は顕在化していない。良好に都市生活と自然が両立していると考えられるが、すべてを完全に把握・予測できるわけではないので、長期的な視点で継続的に点検を行うなど、留意が必要。 	
市民生活とサービスの関わり	7	<p>豊かな文化の根源としての関わり(文化的サービス)</p>	<ul style="list-style-type: none"> アイヌ文化 北海道の学術都市 開拓期に導入された欧米文化との近接性(並木、畑作、酪農、ビール) 雪と親しむ生活の知恵・文化 	<ul style="list-style-type: none"> グローバル化が進む中で、伝統的な知恵が伝わらなくなってきている 開拓使設置から140年の間に急速に発展した都市 	
	8	<p>豊かな暮らしにつながる有用な価値としての関わり(供給サービス)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 身近に豊かな自然が多い レジャーや景観、観光資源としての利用・関わり方が主となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 自然とのふれあいの減少、自然観や生命観の衰退 	
活かす	9		<ul style="list-style-type: none"> 市外の生態系サービスに依存して都市生活を営んでいる。 市内の生物多様性資源だけでは、都市生活は成り立たない。 里地里山のような自然と密着した生活様式はなくなり、日常生活と自然との関係が疎遠になっている。 	<p>地域特性に応じた生態系の保全</p> <p>【都市計画区域外】</p> <ul style="list-style-type: none"> 原生的な自然の保全 【市街地調整区域】 二次林や農地などの人工的自然の保全・再生 【市街地】 札幌らしい都市景観の保全・創出 【河川整備】 多自然型川づくりの推進 <p>野生生物との共生</p> <ul style="list-style-type: none"> 外来生物「入れない・捨てない・広げない」3原則の普及啓発と、外来生物法に基づく対応 野生鳥獣との共生に向けた普及啓発と調査研究 市街地に出没したときの対応 	
	10				<p>環境負荷の低減</p>
	11				<p>歴史的文化的資産の継承</p>
12				<p>自然とのふれあいの場の充実</p> <p>環境に配慮した消費行動の推進</p> <p>環境産業の創出・振興</p>	



戦略	施策の方向性
考える	環境教育・普及啓発
	調査分析・情報共有
	技術開発の推進
広げる	多様な主体による活動の支援
	多様な主体による連携の仕組みづくり
伝える	地域特性に応じた生態系の保全
	野生生物との共生
	環境負荷の低減
活かす	歴史的文化的資産の継承
	自然とのふれあいの場の充実
	環境に配慮した消費行動の推進
	環境産業の創出・振興